

新燃料発明の基本

従来の技術

水と油のように本来ならば混じり合わない2種の液体を種々の目的から出来るだけ均一に混合することが従来から行われている。

例えば重油、灯油等の燃料油と水とを均一に混合すればその混合燃料は燃焼時のCO₂、NO_xの発生量が少なく公害防止にも資することが知られている
それには乳化剤(界面活性剤)が添加され混合液は乳化(白濁)し強力に攪拌することで均一になりやがてエマルジョンとなる
混ぜている混合油の液体粒径は大きく、それにあった可視光の散乱が多いからである。

その為に、比重も重くなり、カロリーも低下する、時間経過で混合油は自然に水と油に分離する経過をたどり実用上は使用することが難しく事業化は推進されていない技術である。

発明が解決しようとする技術

- ①乳化する混合油は白濁する
- ②混合油の液体粒径が大きく、水と油に分離する
- ③カロリーが元の燃料油に対し低い

これらの課題を解決するために本発明ではマイクロエマルジョンの状態になるようなマイクロエマルジョン燃料装置を提供する
装置は混合しようとする水を軟水化、強アルカリ、水素水にすることでマイナスイオンの状態とする。

油は装置でプラスイオン化されこれらを混合部で水の負荷電位を帯電させ混合液がマイクロエマルジョンになる混合を行う。

特殊添加剤も混合時に添加され混合時の色は黒色になるがフィルターを通過することで基油の色に戻る。

混合している液体粒径も小さくカロリーも基油と同じ性能があり、比重も基油と同じ性能を持つことになり、水と油が分離することは無い

この新燃料は世界に類する技術は有りません。

今後 理論説明する研究

水の比重は1.0　油の比重は0.85　この環境で油比重0.85近辺に水の比重を変えることで油となる。

燃料になると　二酸化炭素削減が出来ない、何故なら基油と同じ品質になり

環境負荷低減が低減できないのが油の欠点である、
想定することは、水H₂Oの分子 H₂水素が0, 85近くになり O酸素が水1, 0で
約5%残り、水のまま残るためにフィルターで除去する
投入量は、例えば油100リットル 水43リットルだと143リットル生成される
この数量は、水約5%を除去しても燃料143リットルは確実に確保できる技術である
これから、大学等等で研究しても100年程度の理論解明には時間軸が
必要だろうと考えてる
なぜなら、エマルジョンでも60年くらい歴史があるが事実解明する技術は
事実として無いものである。

株式会社ワールドビジネス
松尾 正行